



Title	Jude the Obscureの一面
Author(s)	斎川, 仁
Citation	明治大学教養論集, 46: 64-77
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/8930">http://hdl.handle.net/10291/8930</a>
Rights	
Issue Date	1968-12
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

# Jude the Obscure の一面

齋 川 仁

## 1

Thomas Hardy は最も暗黒で救いのない人生観・世界観を、イギリス小説に初めてとも言われる形で読書界に提出した作家で、その徹底したペシミズムの点で、同じくペシメスティックな作家の Arnold や Thompson などの二・三の同時代作家とはっきり区分される、というのが大体において定まった彼に対する評価である。しかし、ここに改めて milieu 論を持ち出すまでもなく、彼が、彼を取りまくヴィクトリア朝という時代に無関係なはずがないし、それどころか、人並み以上に敏感な感受性を享けて生まれた彼は時代と風土に激しく感応した、それを考慮に入れなければ彼の作品の鑑賞は不可能であるとまで言えよう。即ち、中期ヴィクトリア期を中心にして、イギリス産業革命の進行とそれに伴う都市・農村の社会的、経済的体制の変化、ダーウィンの学説と Bible 批判を発火点とする精神界の動揺、これらを、一言にして言えば、所謂樂觀的ヴィクトリアイズムの基盤の上への考察しながら、19世紀イギリス全体の歴史の流れに Hardy の諸作品を沈めてみることに、これが彼の真の文学的評価には不可欠条件であることを忘れてはならない。勿論、「時代と作家」の問題は意識すると否とにかかわりなく、多少の程度において、すべての文学批評に行われることだが Hardy の場合は、彼の特異な文学思想がその背景をなす時代思想と一見異質とも見られる上に、ヴィクトリア朝という時代が表面的に理解されている以上に意想外なほど複雑多岐な様相と深さを持っている故に一層見逃し得ないものとなっている。加うるに Hardy の世界が甚だしく片隅の世界で

あり、殆んど一貫してイギリス南部の農村という大地の世界である。都会の進出の前にじりじりと敗退して行く農村へのエレジーを、大地への信頼と信念とを身上とするイギリス的な目で万感の思いをこめて歌いあげたのが Hardy の姿勢であり本質である。未刊のまま破棄した彼の処女作品 *The Poor Man and the Lady* を別とすれば、1871 年の *Desperate Remedies* から、1897年の *The Well-Beloved* にいたる主要長篇小説15篇と短篇小説群の大部分は すべて大地と森林と太陽と星の世界であり、そこに描かれる人間模様の登場人物は men でなく、man である。更には、man の行動の一切を背後から遮二無二押しまくる原動力の love の発動である。従って、概見すれば、イギリス南部の田園風景を、或いは壮麗に、或いは清澄閑雅に、また時には威厳と重厚さをもって描写する筆力において Hardy に比肩しうる作家を求めることは困難である。ここに彼の芸術家としての真面目が縦横に溢れていて、その自由無碍な自信と力をわれわれは直ちに会得する。しかし、この豊麗な自然の世界に行動する登場人物の何という貧しさだろうか。古代ギリシャ的英雄もいなければ、シャロット城の花はずかしき乙女もないし、近代大都市の圧倒的大量の人間が渦巻いて生活している世界で、その悪と罪と不正に苦しみながら、僅かでも人間の立場を求めて苦斗する市民も登場しない。あるものはただ、万古不変の自然にひしひしと取りかこまれて、自然の一部としてうごめいている極小の man の世界だけである。そこに行動する人間は長年月によって維持された Social conventions に支えられる類型的農村社会人であり、因襲的観念がそれを支配するのはむしろ当然である。しかもその農村社会は固定的・停滞的と見られるものではなく、全世界的な産業社会の進出と宗教界、思想界の不安動揺によって根底から揺すぶられはじめた社会であり、その外部からの圧迫と、長年の間に腐敗しつつあった農村社会内部からの崩壊とが相俟って、農村の敗退が必至となったのである。このような舞台に立って Hardy の文学が展開して行くが、彼の文学の世界を知るには、極端に言って、15篇の作品のうち1篇ないし2篇も通読すれば十分であろう。このように一見してまことに単純な彼の文学が、それにもかかわらず、目くるむばかりに激しく揺れ動く複雑な現代世界に

住むわれわれに依然として強い文学的魅力をもって訴えてくるものは何であろうか。それは一つには、人間が潜在意識的に抱いている無力感に共感する Hardy の人生観、世界観がもつ不思議な永遠に変らない吸引力であり、また一つには、人間の歴史と共に古い「愛」の問題である。

## 2

1840年6月、Dorchester 近在の片田舎の Bockampton に生れた Hardy は、粗野な環境にもかかわらず、ひどく感じ易い少年に育ち、十分に耳目を開いて田園の様々な姿に注意を払うと同時に、そこに住む人々の日常の起挙動作を細かに観察した。また、父母からうけついで音楽への興味を通じて色々な ballad や folk-lore にも触れたが、かくして次第に彼の文学の素地が出来上がって行った。

Hardy が George Meredith の忠告によって刊行を思い止まって次に発表した *The Desperate Remedies* が、当時世評の高かった Wilkie Collins の手法を十分に取り入れて、sensationalism が読者に与える効果を計算し、意想外な事件の発展を導くために、偶然の出来事を頻わしいほどに使っていることは周知のことだが、実はその偶然、すなわち、Hap または、Chanceこそ、たとえそれが芸術としての作品の価値をおとすものとなっても、Hardy の長い生涯を支えた人生観・世界観の初発であり、この作品を Wilkie Collins の亜流としてあっさり片づけはならない。むしろ、彼が8才の頃から漠然と醸成してきた厭世観の人生態度が、その一端を具体的に表わしたという点でそれは重要な位置を占めるものであろう。

これにはじまる初期小説群に示される Chance は実に気紛れであり、偶発的なもので、それを越えた思想的深化が見られない。初期の作品のなかでもっとも読者に好まれ愛読されている *Under the Greenwood Tree* (1872) は、作家の成長した手腕によって一種の美的世界へと昇化された田園情緒に、Chance の臭味が消されて、読者はこの作品が依然として持っている Chance という思想性に気づくことなく、一種のアーデンの森的世界に誘いこまれて行く。論者

がその思想性を取りあげたところで一般読者層には無縁のことなのである。すなわち、この作品の持つ思想性である *Chance* の機能が、作品を深化させるだけの思想性をまだ持たないで、ただ、読者の関心を誘うための事件の推進力だけにしかすぎないのである。

次に、彼の最高の作品と一部には評価されている *The Return of the Native* (1878) にはじまる中期小説群に至って彼の世界観が一応の確立を見たと言えよう。筆力は充実に、構成は完成し、背後に潜む思想は深化と安定とを顕著に示している。「帰郷」は *Egdon Heath* に象徴される。この mysterious *Egdon Heath*, 実は *Puddleton Heath* のもつ *Hardy* に対する意義はつとに 1894 年 *Lionel Johnson* によって認められている。 *Under the Greenwood Tree* で、*Dorsetshire* 一帯の美しい田園風景として描かれた平和な、古典的な農村の舞台が、*The Return of the Native* では一変して、平和な農村生活を脅やかす、目に見えぬ巨大な、そして暗黒な帝王としての支配力が *Egdon Heath* の姿となって表われてきた。*Chance* は *Providence* に変わるとともに、単に気まぐれにしかすぎなかったものが、ここでは *God* とも言うべき性格をもつようになる。しかし、この *God* はキリスト教の *God* の観念とは程遠く、これを理解する有力な key はやはり *Egdon Heath* である。その重厚で陰鬱なことは、数百、数千年の年月にわたって、黙々と大地にしがみついて生活してきた不屈の農民の姿そのままであり、その狂暴な力は、暗黒の天空から不意に落下する雷電のようである。*Egdon Heath* は四辺一帯を支配し、すべてのものを平等にその裡に包む。その支配を認めて、それに反抗せずに、ひたすら旧套を守って生活するものは容認されて、それぞれのささやかな生存を許されるが、少しでもその意思に反抗を企てるもの、新たに自己の生活を求めようとするものは、瞬時に、しかも徹底的に復讐を受け、容謝のない罰を加えられて滅亡する。*Egdon Heath* に象徴される *Providence* の前に、群小の生物と人間とに区別が全くない。すなわち、已れに反抗するものは一切を滅亡させるという点で、*Providence* は人間に indifferent なのだ。これは、夜の女王とも形容しうる *Eustacia Vye* が、*Egdon Heath* から脱出しようとして、大雨の夜、

遂に万策つきて投身自殺をする終章の劇的なシーンよりも、Clym の母、Yeobright 夫人が、息子とその妻 Eustacia と和解することに決心して Alderworth までようやくやってきたのに、不運ないきさつで息子に会うことができないで、やむなく帰宅する途中、疲労と傷心の身を Egdon Heath に棲息する毒蛇にかまれて死ぬところのクライマックスによりよく表われていると思う。更には、1886年の代表作の1つの *The Mayor of Casterbridge* で、人間の意思力を象徴する Henchard が、冷酷な力によって執拗に復讐をうけ、彼の悲劇的とも思われる努力の果てに、Egdon Heath に横死するものもその典型的な例である。すなわち、中期小説群において、Providence、または、Heaven, Unfulfilled Will とも呼ばれる力は、blind で dark であり、人間の運命に対し indifferent な力を振うという特徴を持つものだと言えよう。

次に、完成された作品群としての後期小説群になれば、まず1891年の *Tess of the D'Urbervilles* で、Providence は1つの限られた世界の力、すなわち、Egdon Heath の姿をかりた力としての限界を脱して、広く宇宙に遍在する力としての性格を持つようになる。自己に反抗するもの一切を、人間であると否とにかかわらず、無残・冷酷に押しつぶして行く力としての Providence は、その有意思的な面を消失して、天地万物にあまねく遍在する Immanent Will として1段と深化されている。後に *Dynasts* で「宇宙内在の意思」と命名されたこの力は、それ自体、人間世界の喜怒哀楽、善と悪に関係がなく、従って広大な時空の世界では全く些細な存在である人間の生活感情や思考に極めて無屯着である。それだけに関して言えば Hardy は、実に暗黒で救いのない世界を提示する。そして、それをそのまま肯定し、その招来する結果に、無条件的に拱手傍観の態度を取るのがおそらく真のペシミストであろう。だがまたそこに Hardy が単なるペシミストで終わらなかった点もある。

「この世の中は、無益な行為で混乱している」<sup>(1)</sup>

その通りであろうし、無限の彼方から人間世界を眺めたならば、人間は無にひとしい存在であることは論を俟たないであろう。しかし、*The Mayor of Casterbridge* の Henchard に代表される人間は、宇宙意思に支配される人間の

運命と、社会慣習からくる不正の暴力を認知したうえで、やはり、止むに止まれずに自己の自由意思を信じ、幸福への願望をひたすらに追求して行き、たとえその結果として悲惨な結果におち入っても、この *inscrutable* な宇宙意思に逆って行為するのである。そこに人間の偉大な悲劇があり、Hardy をして単なるベシミストに止まらさない芸術性がある。

*Tess of the D'Urbervilles* の悲劇性は、「星の冷たい鼓動が、頭上の暗黒な虚空の中で、はかない二つの生命に超然として脈打っている」<sup>(2)</sup> その広大な宇宙を前にして、紗織のように感じ易い、雪のように汚れを知らない美しい娘の Tess が、漠然と不吉な力の存在に気がつきながら、なおそれに反抗を企てて、その不吉な結末の予感にふるえつつ、愛人 Clare に捨身の愛をつくすところにある。宇宙意思の表われの有名な場面である Angel Clare の Sleepwalker としてのシーンを想起するだけでもその例として十分であろう。夢遊病者として、全く無意識に、何ものかにあやつられているかのように、危険な場所をふらふらと歩いて行く Clare の腕にだかれていながら、少しもその危険を感じないで、むしろ、そのまま二人一緒に死んでしまいたいとさえ願う Tess の運命はおのずと分明である。尚、ここで忘れてならないのは、Tess の運命を狂わせたのは単に宇宙意思だけではなく、Clare に代表される、人間社会が持つ社会悪とでも言うべき社会慣習の不正と、そういう因襲的社会によってはぐくまれた人間の無知蒙昧さも忘れてはならない。小説 Tess ではこの後者のうち、人間の愚かさについて、R. Williams が、「正しいときに、正しいこと」をなし得なかったのが Tess の悲劇なのだと言っているように、人間の無知が取りあげられて、逆に、「正しいときに、正しいこと」をなし得る未来へのかすかな予見が行われていると思われる。しかし、今一つの社会の不正については殆んど明確でなく、*Jude the Obscure* を俟たねばならない。

*Jude the Obscure* (1895) は、批評家によっては最大の秀作とされるがその当否はさし措いて、Hardy が真正面から社会慣習の不正と取り組んだ作品である。すなわち、従来のように、Chance, Providence 又は Immanent Will と熱心に追求してきたものが前面から影をひそめて、(勿論、Things are as they are,

and will be brought into their destined issue<sup>(4)</sup> また、……the First Cause worked automatically like a somnambulist, and not reflectively like a sage…<sup>(5)</sup> など僅かにあとを止めてはいるが) 結婚問題の形をとって提出された社会慣習への抗議と個人の自由と幸福追求の意思との関係が大きく姿を表わしている。Hardy の作品中, bitterest で darkest な作品と言われるこの小説は, Rutland が, …it is due to Hardy's deliberate determination to create a nasty taste: Sue's return to her first husband she loathes, is one of the most horrible things in fiction. It was meant to be horrible. The murders and suicide of 'Father Time,' and the still-birth were intended to be a climax of horror. と述べているが, たしかに Hardy が当時の社会慣習に対して積極的に発言していることは間違いがなく, Jude の悲劇は, ヴィクトリア朝後期の社会の冷淡で無責任な諸制度と人々の無意味な行為の結果である。<sup>(7)</sup> 或いは, Rutland の論じているように 1889 年 12 月に起きた有名な Parnell case に刺戟されて Hardy が筆をとったとも極論すればそう言えるかも知れない。そのため, この小説は *The Return of the Native*, *Woodlanders*, *Tess of the D'Urbervilles* などの作品に較べて, 構成が甚だ不自然で, 筆致に彼らしい豊かで細やかな味が薄く, propaganda のための小説とみれば返って納得の行くような趣きで, 文学作品としては必らずしも充実した優作と言えない。それはそれとして, Parnell case は世の論争と捲きおこし, 結局, Parnell はすべてを失って死んでゆくことになるが, それがかっかけとなった結婚と恋愛と離婚の問題はその後論議がつづけられ, かねてから社会の慣習や道徳に強い批判をもっていた Hardy が Jude の創作へとそそられたとする Rutland の説は相当の説得力をもっているものと思う。

Hardy が Jude で社会の不正と取り組んで寸時も目をはなさないのは, Weber の言葉をかりれば, 「興味をそそる田野人は出てこない。リンゴ園の話しも, 四季の詩的説明も, 見事な剣術の試合も, 夢遊病者や断崖にぶら下がる劇的シーンもない。Hardy は, 読者に Jude の薄幸に同情してもらうことで満足しないで, 更に, 読者の心を動かして何か実際の行動を取ってもらうことを望ん



だ」<sup>(8)</sup>のである。Sue Bridehead のような所謂解放された女性のために従来  
の婚姻制度に手を加え、また、Oxford をはじめとする大学制度や教会組織を  
改正してもらうことを念願としたのである。勿論、このような革進的提言は、  
彼も嘆いて言ったように、五十年は早すぎたのであって、その失敗、すなわ  
ち、Jude に対する世の激しい非難は彼といえども予期していたようで、Later  
Years にその様子がうかがえる。

Hardy の抗議は、婚姻そのものの善悪ではなく、結婚制度が長い年月の間に  
一つの因襲的な慣習となって、いつのまにかゆがめられ、それと同時に逆に人  
間の精神生活を強く束縛することになり、人間本来の自由な、本能的発動であ  
るべき愛が、結婚の形態をとると忽ち人間を束縛するもの、自由な男女の交渉  
を制約するもの、そして遂には当事者の魂を萎縮させる家という一種の牢獄と  
なる<sup>(9)</sup>ということにある。Jude と Sue が、それぞれ誤った結婚のあとで、漸  
やく結ばれるまでの慣習的手続きの厄介さ。一緒に生活することになったあと  
でも、やはり制度上の問題が、Sue の進歩的知性と方向を相反するため、実  
際の夫婦生活を営むことをさまたげたこと。更には、三人の子供を失い、死児  
を産みおとしたのちの Sue の異常な精神的変化が、主として、前夫 Phillotson  
との形式上の正規の夫婦関係によるものとしていること。以上、二・三の例を  
あげても Hardy の社会慣習への抗議がはっきりしている。

Hardy はまた大学の問題にも注目している。

当時の大学は、漸やく自意識に目覚め、自己教育を志す労働下層階級に対  
して全く門を閉じて彼らをよせつけなかった。一方では産業革命の進行に伴っ  
てますます目覚めた労働者の数は増大して行った。この矛盾をついたのであ  
り、その窮状は Jude によく表わされている。Jude がその困った状態を手紙  
にして切々と訴えた Biblioll College の Master から返書には、

...you will have a much better chance of success in life by remaining  
in your own sphere and sticking to your own trade than by adopting  
any other course.<sup>(10)</sup>

と何のへんてつもない、全く常識的な冷たいアドバイス、鉄のように冷酷な

拒否の解答があったにすぎない。少年の頃から死ぬまで *Jude* の夢であり生き果斐であった the city of learning の Oxford は、*Jude* のもつ天賦の知力、一生の運命を左右した彼の志、鏝骨の勉強、その一切をしりぞけてしまった。行間に滲む並々ならない *Jude* の大学への不信感、同時に、彼が生涯持ちつづけた学問への憶れと夢は、まさに *Hardy* 個人の伝記的反映であって、そこから *Jude the Obscure* は *Hardy* の否認にもかかわらず彼の自伝的作品と言われている。

以上のようにこの作品の主要テーマは、結婚問題、大学問題を代表とする社会慣習、すなわち artificial forms of living<sup>(11)</sup>であり、人間が勝手に作りあげた制度が、自然法ともいうべきものに代って、恰も制度の方がむしろ基本的なものであるかのように暴威を振ることが *Hardy* に我慢ならなかったのである。長い間の天下泰平ムードに酔いしれ、旧套を恋々と守っているヴィクトリア朝の人々が、*Tess* や *Jude* に対し、一斉に批判し非難したことは当然である。*Tess* の不評に *Hardy* が焦立ったとか、*Jude* が Never retreat と自らを励ましたとしても、それらは *Hardy* がかかる世間の不評を予期していなかったことの証拠にならない。ただ、感受性が著しく鋭く、世評に人一倍敏感な *Hardy* が、予期していたとしても、やはりそれを無視し得なかったにすぎないと思う。従って、そういう世評を予見しながら、なお敢然として社会慣習の不正弾劾に立ち上ったその情熱、文学者として career をことによると失うことになるかも知れない危険をおかすその止むに止まれぬ発言、ここに *Hardy* の人として、文学者としての権利があるので、これは前作 *Tess* にも *Clare* の1つの性格となって出てきている。つまり、父母からうけついで conventional な道德感、結局は固苦しい狭小なキリスト教的世界観に閉じこめられたイギリス社会から与えられたものだという事であり、*Clare* は最後まで chastity に対する窮屈な考え方を捨てなかったが、それが *Tess* の悲劇の決定的原因となったので、ここでも社会の慣習的道德観に反抗の姿勢を示していると言える。しかし、再々述べたように、それが明確な形をとったのは *Jude the Obscure* であって、*Webster* の言うように<sup>(12)</sup> それが全く暗黒な小説、ペシミ

テックな、救いのない小説とみる見方もあろうが、見方をまた変えれば、かえってそれだからこそ、Hardy 自身が主張している ameliorist としての特質がこの小説に探れるとも言えるであろう。それが一層発展して *The Dynasts* で人間の暗い未来に一筋の光を投げかけることになる。つまり、小説家として Hardy と詩人としての Hardy との間に、思想上の断絶があるはずはない。再言すれば、人間を圧倒する宇宙意思が支配する中期小説群から次第に思想上の変容が行われて、最後の大作の *Jude* では、人間を追いつめるものが、絶体不可避の意思というよりは、人間の自由意思の発動をさまたげる social conventions であるとの提言に変化したのである。

*Jude* において、Hardy は一応は the First Cause worked automatically… と述べ、人間は無意識に、不可避免的にそれぞれの定まっ運命へ導かれると言う。ここでは、抗議すべき相手は人間でなく、The First Cause ということになる。これは全く無意味なことで、ameliorist たる Hardy にとってもそれは無意味である。つまり、無意味なことは、百万の口舌を以てしても依然として無意味だということである。かかる世界では、Phyllotson も Arabella も、*Jude* や Sue も、すべての登場人物は、たとえ、それぞれの仮面をつけて舞台に出ても、結局は無意味な人形の世界である。従って、ただ単にその立場に止まることなく、*The Dynasts* の世界へと発展する stepstone としての存在理由を *Jude the Obscure* に求める必然性がある。

### 3

以上、主として社会慣習の不正に対する抗議としての面を *Jude the Obscure* に求めて論じてきたが、また、Hardy は writer of love であり、彼の作品のすべてに love の theme が一貫して流れている。これを見失っては、彼の文学を論じる要件を欠くことになる。文学の世界はつまり人間の世界であり、人間の世界はまた愛欲の世界でもある。文学→愛は当然の関係だが、Hardy ほど愛、特に女性の愛を徹底的に追った作家は稀であって、その見事な結晶は Tess となって永遠の生命を与えられた。また、清純ながらも少々 flirt な愛すべき

Fancy, 偶然の犠牲となって哀れな終末を迎える Elfride, 男の真価を見誤りながらも、誠実な Oak に救われる美しい Bathsheba, 夜の女王ともいうべき華麗な Eustacia, 次いで Elizabeth Jane, Grace と代表的ヒロインの名を並べてみても、いかに Hardy が女性の作家であって、種々な女性像の創造に碎身の苦心を払ったかが分るであろう。これら様々のヒロインをつなぐ一線が love である。愛のもつ不可思議な力, 人間存在の根底にかかわる力は, Hardy によれば, 女性に表われるのであって, これを Cecil は, 「Hardy にとって, Byron とじく, 愛は女性の全存在である」と言っている。女性は愛の顕身で, 愛は女性と一体不可分の生命本能である。

Jude は幼少の頃両親に死別し, Marygreen にいる叔母に引きとられて育つ薄幸の身ではあったが, 身体壮健で, 片田舎育ちには珍らしく向学心と野心に富んだ真直ぐに生長した青年である。時には, 自分を世に用のない余計者だと考えたり<sup>(13)</sup> 生あるものを傷つけることに堪えられなく, 木でさえ切り倒されるのを見るのがつらかった優しい心根を示す<sup>(14)</sup> ことがあっても, 妙に感傷的な弱い少年ではなく, 叔母の生計を救って働らきながら, 学問への初志をしっかり守っている志の直ぐな少年である。この心根の優しさと素朴さが Jude の美質であると同時に彼の悲劇への決定的要因ともなった。Jude は学問の府 Christminster への憶れを最後まで失わなかったとはいえ, *The Mayor of Casterbridge* の Henchard のように, 一切を棄てて顧みることなく自己の信念を押し通そうとする意思の人ではない。時にはアルコールに溺れたり, 女の魅力に捕われる弱い男である。心根の優しい彼はどんなことがあっても女性を傷つけることができない。愛の生活に打撃を受け, 果てしのない放浪の生活をつづけ, バラ色の人生観にはじまった彼の生涯が, 世の慣習と愛の苦しみに次第に灰色の絶望の世界へと変って行くその過程において, 彼を支えていたものは何であろうか。夏の日, 華やかな祭りの音と, 人々の歓声とを窓外に聞きながら, 一滴の水を求めて, Sue の名を, そして Arabella のそれを, 更に最後に Sue の名を呼びながら, 静かすぎるほどの穏やかな死を遂げた Jude のことを考えると, 彼を支えたものは Sue への愛とも考えられるかも知れ

ない。しかし、何故に Jude は Sue を最後まで求めつづけたのか。それは Sue でなく、彼自身であつたらう。Alvarez のように、Jude は narcissism を彼自身のうちに見出したのだと言うのではない。Jude は幼少の時から死ぬまで変らない学問と思想への情熱の reflection を Sue に見ていたのである。Sue は Jude の言っているように “a woman-prophet, a woman-seer” であり、また、“upon the whole, a sort of fay or sprite—not a woman” であつて、人によっては Sue にある女性の理想像をみるかもしれない。知性に恵まれ、因襲にかかわることなく、男女間の理想的愛の姿に憧れ、感受性にも富む Sue はその資格があるかのようである。しかし、彼女は遂にはわれわれに抵抗感を与えるエゴイストにすぎない。Sue は sexless と思わせる肉体と、sex を憎悪する精神をもちながら、男性に近づいては、その欲望をかき立てて彼を苦悶のどん底につきおとしながらすぐに自分の仕打ちを後悔するのに、またも同じことをくりかえす。そのために青年を1人死なせ、あげくには歯がゆいまでに優しい気持ちの Jude に、“You are a flirt.” と言わせる仕議となり、彼女はこれまたお人好しの Phillotson と結婚式をあげる。しかし、夫である彼があやまって彼女の部屋に入ったとき、恐れあまり、二階の窓からとびおりてしまうほど彼との性生活を頑固に拒否しつづけ、遂には彼のもとを逃げだして Jude と一緒になるが、依然として性生活を拒否し、ただひたすらにプラトニックな愛の世界に閉じこもろうとする。にもかかわらず Arabella の出現に脅えて忽ち Jude に身をまかせる。曲折のあつたあとで再び Phillotson のもとに戻るが、その動機の利己的ないやらしさと、戻つても夫婦関係を表面的なものに止めた彼女の頑固さなどの事実を列挙してみると、Sue は決して Hardy が意図したような女性ではなく、むしろ、Lawrence の言うように、Arabellaこそ其の女性、真に Jude を男性として求める女である。どんなに Sue が言葉をつくしても、無言のうちに男性を一挙にひきつける Arabella にかなうべくもない。Sue の求めるのは自身の影であり、Arabella が抱きとるのは生きた男性である。Arabella は Sue の対比的登場人物として、Sue の社会への protest の一つの手段として Hardy が創造した人物で、Sue の知的で、

ethereal な女性像を浮き上がらせるために、野性的で、術策家で無屯着な自然の子として意図されている。だが、彼女は作者の期待に反し、Sue よりはるかに生きた女性であって、肉体をもち、全く女性として特質を失っている Sue にくらべ Arabella は血肉を具えた立派な女性である。Jude の一面と Sue とは同一であるが、Arabella は Jude に欠けているものすべてを具えている。彼女はどんな事態にも冷静に計算をめぐらす能力をもち、自分の窮状を自分で打開する才能と生活力がある。Jude を惹きつける女性としての魅力を十分すぎるほどにもっている彼女は、精神的苦闘に症れ果てた Jude が立ち戻って生気を回復する母なる大地の如き存在で、がっしりと構えて揺ぎのない常識的生活の権化であり、彼女にはいわば社会慣習を象徴する面があって、Jude は彼女にしっかり掴まれ、生殺与奪の権を握られている。しかも、Jude は社会慣習に捕われぬ人間自由の世界を望んでやまず、その象徴たる Sue に精神的に惹きつけられる。Hardy によれば、人間は例外なく幸福を求めるが、loveこそ人間の幸福の追求の推進力であると同時に人間を破滅に追いやる力でもある。Jude は Arabella のために大地にしばりつけられても、愛の力により自由の世界への跳躍をあきらめることなく無二無三努力をにくりかえす。そして、社会の不正に対する悲痛な抗議のつぶやきを、Sue という言葉に借りて残し、祭りのざわめきのうちに死んで行ったのである。

#### 注

- (1) R. Williams: *Thomas Hardy, an Appreciative Study*
- (2) *Tess*: Phase the First, The Maiden
- (3) Carl J. Weber: *Hardy of Wessex* P. 210
- (4) *Jude*: Part Five, at Aldbricklam & Elsewhere 3
- (5) ibid
- (6) W. R. Rutland: *Thomas Hardy* P. 248
- (7) C. J. Weber: *Hardy of Wessex* p. 199
- (8) ibid: p. 206
- (9) R. C. Carpenter: *Thomas Hardy* p. 142
- (10) *Jude*: Part two, at Christminster 6
- (11) A. P. Elliot: *Fatalism in the Works of Thomas Hardy* p. 100

- (12) H. C. Webster: *On a Darkling plain* P. 183
- (13) *Jude*: Part One, 2
- (14) *ibid*